

氏 名	む とう ゆ り 武 藤 百 合
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 352 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 人 間 学 専 攻
学位論文題目	アトピー性皮膚炎患者の体験世界 ——共に生きる生活をめぐって——
論文調査委員	(主 査) 教 授 鯨 岡 峻 教 授 杉 万 俊 夫 教 授 岡 田 敬 司

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、面接インタビュー調査におけるアトピー性皮膚炎患者9名の語りに基づき、アトピー性皮膚炎患者が皮膚の病を抱えながら送る日常生活の中でどのような体験をしているのか、その体験内容を生き生きと描き出し、病を抱えて生きる日常生活の実態や、望ましい心理的援助について明らかにしようとするものであり、5部構成となっている。

第1部はアトピー性皮膚炎という病の特徴や、その心理・社会的問題と最近の研究の動向について取り上げた3つの章から成る。まず第1章では、アトピー性皮膚炎の定義と特徴について述べた上で、環境世界の様々な要因が関与する病であるが故の日常生活上の困難や、ステロイド外用薬にまつわるアトピー性皮膚炎治療の混迷状態について述べている。第2章では、アトピー性皮膚炎の特徴である慢性の激しい痒みや、美的器官としての皮膚の損傷によって生じる葛藤について詳細に述べ、この病を抱えるが故に他者と共に生きることが難しくなることについて論じている。以上のような論を踏まえ、申請者は、アトピー性皮膚炎患者の抑鬱的・神経症的な側面に焦点を当てがちであった従来の研究の問題点を指摘し、アトピー性皮膚炎の問題は、患者を日常生活から切り離し、その心理面だけに焦点を当てて論じることは出来ないと述べている。更に第3章では、10年間病院でアトピー性皮膚炎患者の心理臨床に従事してきた申請者自身の体験から、アトピー性皮膚炎患者一人ひとりの苦しみの体験世界を明らかにする必要があること、また患者がこの病を抱えて生活を営むという広い視野に立ってこの疾患を問題にする必要があることに触れ、それを踏まえて心理的援助を考えるべきであると主張している。

第2部は、記述的方法論と調査手続きについて述べた3つの章から成る。まず第1章では、アトピー性皮膚炎患者の搔破行動のエピソードを挙げながら、研究者が研究協力者とのあいだで間主観的に感じ取ったことをできるだけありのままに記述することが、アトピー性皮膚炎患者の体験世界を捉える上では必須であると述べている。特に、アトピー性皮膚炎という疾患は、患者が抱えるさまざまな感情や、他者との関係性のありようが全て深く関与する病であり、その点からも、間主観的に捉えられた内容を詳細に記述することにより、研究協力者の全体像が浮き彫りになると論じている。第2章では、面接インタビュー調査の舞台となるK病院と、K病院におけるチーム医療について詳細に記述し、申請者自身の臨床心理士としての歩みや、一生活者としての立ち位置を振り返っている。第3章では、調査手続きと研究協力者9名のプロフィールについて記している。

第3部は、患者の生活世界においてこの病がどのような意味をもつかを論じた3つの章から成る。第1章では、日常生活における病の意味について、3名の語りをもとに詳細に分析している。アトピー性皮膚炎とは生活世界における様々な事柄や出来事が凝縮された病であり、嫌悪感や不安感など負の感情が引き起こされる一方で、それが心身のストレス状況の警報としての意味をもつ場合がある。そのような病を抱えて生きていく以上、この病にまつわる負の感情や体験を、患者自身が自分の皮膚を日々主体的にケアする実践に繋げ、また患者自身の身体感覚に基づいて、自ら何処までなら大丈夫という「セフティゾーン」を探し出していくことが必要であることを明らかにしている。第2章では劇的な痒みにまつわる主観的体験について2名の語りをもとに検討している。劇的な痒みに対処するためには、自己の身体の状態を丁寧に見つめ、それに対

処するための自身による身体的ケアが必要であるが、そればかりではなく、特に身近な他者の共感的な言葉がけの中でその他者に「さすってもらう」ことが痒み自体や、痒みにまつわる負の感情を軽減させる上に大きな意味をもつものであることが協力者の語りから明らかになった。また、第3章では、研究協力者1名の語りを基に、ステロイドリバウンド体験から回復していくプロセスを明らかにし、生活の質が著しく低下した状態から回復する中では、患者自身に「同じ痒みの共有体験をもつ他者との交流」や「仕事を無理せず自分に出来る範囲の行動にとどめること」が必要であり、また「生きるための未来への希望」が大切であると論じている。

第4部は、アトピー性皮膚炎患者の体験世界を「他者と共に生きる」という観点から論じた4つの章から成る。第1章と第2章では、患者の社会的生活に焦点を当てるなかで5名の語りを取り上げ、皮膚症状が悪化しないように個人のペースを守ること、および他者とのやり取りや過去の振り返りなどを通して、心身の負担となる考え方を自分自身で見つめ直すことの大切さについて述べている。第3章では他者と共に生きることの難しさについて1名の語りを基に検討し、可視的な皮膚の病を抱えて生きる上では、特に他者との相互主体的な関係のもちようが重要であると詳細に論じている。第4章では、家族関係とアトピー性皮膚炎との関連性に焦点を当てた2名の語りから、この疾患について家族とのあいだでなされる情動の共有や気持ちのやり取りが、症状の現れ方と密接に繋がっていることを論じ、身近な他者との関係性とこの病との繋がりを明らかにしている。

第5部は2つの章と総括から成る。第1章では第3部と第4部の研究結果を主体という概念に沿って総合的に考察し、それらの内容を踏まえて、第2章では望ましい心理的援助について、「他者と共に生きる主体化のプロセス」への援助として論じている。それを列記すれば1)患者が主体的に自己の心身と向き合うことへのサポート、2)この病の意味への気づきを得るためのサポート、3)可能な範囲で社会生活を送り、個人のペースを守ることへのサポート、4)入院体験を生かすことへのサポート、5)他者と交流する機会をもつことへのサポート、6)この病に関する知識や体験を増やすことへのサポート、7)信頼できる医療機関に繋ぐサポート、である。9名の患者の語り全体を通して、アトピー性皮膚炎は、日常生活において患者自身が主体的に自己の心身と向き合うことが必要不可欠な病であり、他方で、主体としての自己成長を促す可能性をもつ病でもあるとまとめている。最後に、環境世界全般の問題が絡む病であるアトピー性皮膚炎には、多職種チーム医療による共同的援助が必要であると述べ、対人関係の基底にあるさまざまな感情が深く影響するこの皮膚の病は、医療におけるそのような観点からの援助が必要であると指摘している。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、病院で10年間アトピー性皮膚炎患者の心理臨床に従事してきた申請者が、アトピー性皮膚炎患者が日常的に体験している世界がどのようなものであるかを、面接インタビュー調査に参加した9名の研究協力者の語りを通して描き出し、この病を抱えて生きるこの意味を明らかにして、その望ましい心理的援助の在り方を提示した意欲的かつ独創的な論文であり、5部構成となっている。

第1部では、アトピー性皮膚炎という病の特徴やその生活世界における諸問題、医療におけるアトピー性皮膚炎治療の混迷状態について整理した上で、劇的な痒みによる生きにくさはもちろん、人目に触れる皮膚症状によって家庭や社会において他者と共に生きることの難しさについて詳細に論じている。その上で申請者は、各種心理検査を用いて患者の内面を探ることに傾いた先行研究を批判的に検討する中で、日常生活から切り離されたかたちで患者の心理面の問題のみを論じることはできないと主張し、アトピー性皮膚炎患者一人ひとりが体験しているこの病の苦しみそのものに肉薄する必要があること、さらに、アトピー性皮膚炎そのものに焦点化するのではなく、皮膚を病む患者が一生活者としても生きているという現実に立ち返って、この病の問題を考える必要があることを説得的に論じている。

日常生活の様々な要因が関与するこの病をアトピー性皮膚炎患者がどのように生きているのか、その体験世界を詳細に論じた研究は従来見られなかったものであり、この第1部の議論はこの研究領域に新たなパースペクティブを切開く重要な意義をもつものである。

方法論を中心に論じた第2部では、申請者自身の臨床経験や、アトピー性皮膚炎患者の搔破行動に関する多数のエピソードを通してまとめたものである。特に、アトピー性皮膚炎患者の筆舌に尽くしがたい劇的な搔痒感など、患者の苦しみを取

り上げる際、従来のような質問紙調査などの量的研究によっては、その苦しみの内実に迫ることは到底出来ない。そこで申請者は、研究者が研究協力者と関わり合うなかで、研究者自身の生きた身体に間身体的、間主観的に感受されてくる事柄を、できるだけありのままに、研究者自身の立ち位置も含めて詳細に記述する必要があること、またそれによって始めて、研究協力者の全体像を浮き彫りにすることができることを主張する。

アトピー性皮膚炎患者に対してこのような間身体的視点からアプローチした研究は従来見られなかったものであり、患者の苦しみの実相に迫る研究方法として高く評価することができる。また、この研究方法はアトピー性皮膚炎のみならず、他の心身症患者を対象とした研究にも応用できる可能性をもち、その意味でも大きな意義をもつものである。

第3部では、6名のアトピー性皮膚炎患者の語りを取り上げ、日常生活におけるこの病の難しさを生き生きと描き出すことに成功し、またその病が本人に対して持つ意味を深く掘り下げている。とりわけ、ある患者の「痒みを抑えようとして、患部に爪楊枝を突き刺す」エピソードなどは、死に至るわけではないこの疾患がどれほどの苦しみを患者に与えるものなのか、この疾患を持たない人をも納得させるだけの迫力をもって迫ってくる。この疾患のもつ苦しみをこれほど如実に示してみせた研究は、これまでになかったものである。

この病は、このような劇的な痒みをもたらす一方で、突然の寛解と増悪を繰り返す病でもある。そこから、これを病む人は自身への嫌悪感や不安感といった負の感情に引き込まれることになるが、それに対処するために、患者は、自ら主体的にこの病いと向き合い、自らの生を守るための独自の「セフティゾーン」を探求する必要が生じる。また、痒みが生じる時に他者から受ける行動制御的な言辞（「掻いたら駄目！」）は、アトピー性皮膚炎患者にとって心的負担を増し加える一方で、苦しみへの共感的な言葉と共に「さすってもらう」という身近な他者との情緒的・身体的触れ合いは、痒みを大幅に軽減するものである。こうした事実を対話の中から導き出すことを通して、申請者はアトピー性皮膚炎患者の皮膚を掻きむしる行動を「嗜癖的搔破行動」と一律的に捉えがちであった従来の医学的観点に疑問を投げかけ、人との関係性の視点を治療に持ち込む必要を明らかにしている。更に、ステロイドリバウンド状態からの回復プロセスについて詳細に論じた事例では、生活の質が著しく低下した当時の患者の状況や心理を克明に描き出すことを通して、回復には「生きるための希望」が必要不可欠であると論じている。

この第3部全体は、アトピー性皮膚炎患者の体験世界の記述的解明、治療の新しい方向性の提示、回復プロセスの検討など、従来の研究には見られなかった斬新な内容となっており、学界への大きな貢献であると高く評価することができる。

第4部では、周囲他者と共に生きる生活を中心に、6名の研究協力者の語りを詳細に検討している。その中で、アトピー性皮膚炎患者が、この病をきっかけに社会生活において自分なりの主体的な行動を取るに至る様子や、自己の在り方に気づきを得る様子を克明に描き出し、過剰適応的であると評されてきた患者たちの背景にある心理を明らかにしている。この考察の中で、この病を患うことを通して、患者自身「主体として」成長する可能性があるという指摘は、この病に関する従来の治療観を一新するものである。

第5部では、第3部と第4部の結果を踏まえて全体を総括し、最後に望ましい心理的援助の在り方を提示している。特にアトピー性皮膚炎患者の「主体性」をサポートする心理的援助について論じた点は、今後のこの病の臨床を方向付けるものとして重要である。

このように、本学位申請論文はアトピー性皮膚炎患者の心理臨床に新しい視野を切開いた独創的かつ精力的な論考として高く評価できる。また、アトピー性皮膚炎という病を、周囲他者との関係性およびその人の人生という文脈から捉えようとした点で、社会環境の中で人間形成の在りようを考究する共生人間学専攻人間社会論講座の目的に叶った優れた論文である。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年1月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。